Kawara-Ban

名大病院 NEWS かわらばん

2018.03 108号

CONTENTS

① ・患者安全の方針・手順を定め JCI 受審に向けた準備を加速
・診療科レポート「移植外科」
・季節のお話「高齢者の季節の変わり目と体調不良」

② ・助産師のご紹介
・退職のご挨拶
・中央診療棟Ｂ開院記念講演会を開催
・ナディック通信

③ ・名大病院歴史探訪
・平成29年度名大病院災害訓練を実施
・特定基金 医学部附属病院支援事業へのご協力のお願い
・ボランティアさん募集

④ ・世界屈指の拠点から未来を見つめ常に最高水準の内視鏡治療を
・ミニニュース
・健康講座「2018年3月8日は『世界腎臓デー』」
・禁煙のお願い
・かわらばん HP のご案内

名古屋大学医学部附属病院

理　念 ● 診療・教育・研究を通じて社会に貢献します。
基本方針 ● 国際的な患者安全目標を尊守し、以下を実行します。
一．安全かつ最高水準の医療を提供します。一．優れた医療人を養成します。
一．次代を担う新しい医療を開拓します。　一．地域と社会に貢献します。

〒466-8560 名古屋市昭和区鶴舞町65番地　TEL 052-741-2111（代表）
https://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/

ホームページで「かわらばん」のバックナンバーがご覧いただけます

特集 TOPICS ① 患者安全の方針・手順を定め JCI 受審に向けた準備を加速

名大病院では「患者安全」や「医療の質と改善」などについて、世界標準の基準で医療機関を評価・認定する、JCI（Joint Commission International）認証の取得を目指しています。本審査に向けた準備の状況や受審による患者さんのメリットについて、JCI 受審統括会議長の松下正教授にお聞きしました。

全職員で遵守する方針・手順を策定

ＪＣＩは医療機関の機能を評価する国際的な認証機関で、ＪＣＩ認証の取得は世界に通用する病院であることの証となります。当院は約２年前から準備を進め、２０１７年８月に模擬審査を受審しました。現在は、その際の指摘事項の改善に取り組み、本審査に向けて準備を加速しています。

具体的には、患者さんが来院され治療を受けて帰宅されるまでの全領域にわたる方針を定めた、１５０種以上の方針書の作成を進めています。ＪＣＩの基準では、医師や看護師などの医療職のほか事務部門の職員も含め、全職員が病院の方針・手順を遵守することが求められます。個人の力に頼らず病院全体で医療の質を高めることが目的で、画一的なマニュアルとならないよう工夫している最中です。さらに、当院は大学病院であるため臨床研究や教育の質が評価されるほか、病院のガバナンスも点検され、認証取得のハードルは極めて高いものとなっています。

患者さんの権利や安全を最重要視

ＪＣＩ受審は、患者さんにとっても大きなメリットがあります。ＪＣＩは患者さんの権利を非常に重視しており、例えば医療提供の際、常に患者さんに「痛み」の度合いを確認するといった取り組みが求められます。また、患者さんの安全のために、自然災害を含めたリスク対策を講じる必要もあります。その対策も名ばかりではなく、例えば火災に備えて全職員が火災訓練を行うのはもちろん、消火器の設置場所や手術室からの避難方法、非常口サインに沿った避難経路などを全員が把握し、実際に行動できなければなりません。当院では他に、ＢＬＳ（ベーシックライフサポート）という一次救命処置の講習を全職員が受講する準備を進めたり、感染対策やセキュリティ対策のために施設を整備するなど、患者さんの安全や医療事故防止を最重要項目に位置づけ、体制の強化を進めています。

高品質の医療を持続可能なものへ

一連の活動は認証取得だけがゴールではありません。ＪＣＩは認証後も３年毎に更新が必要となり、高い品質を持続可能なものにする努力は永遠に続きます。医療機関は民間企業に比べると、専門家集団であるがゆえに個々の専門性への依存が高い傾向にあります。しかし、個人の力に頼ることには限界があり、これからは病院としての総合力を高めることが不可欠です。企業文化という言葉があるように、ＪＣＩの認証制度を利用して病院文化をどこまで築き、維持できるか。それが最終的には患者さんへのメリットとして還元されます。確固たるガバナンスと方針でもって質の高い医療を確立し、それを未来へ持続させたいと考えています。

診療科レポート「移植外科」

移植外科長　小倉　靖弘

皆さん、肝臓移植は日常診療と少しかけ離れた特殊医療と思われていませんか？

肝臓という重要な臓器の働きが弱まって生命に関わる状態になってしまった場合に、元の元気な生活を取り戻すことを目的として実施する治療が、肝臓移植です。

手術の方法には「脳死となった方から肝臓をいただく脳死肝移植」と「ご家族から肝臓の一部をもらって実施する生体肝移植」の２種類がありますが、国内の肝移植の約９割は生体肝移植です。移植が必要となる肝臓の病気にはさまざまなものがあり、肝移植が望ましいかどうかを判断しながら準備を行っていきます。移植医療は、院内の多くのスタッフと協力しながら進めていきますので、病院の総合力が非常に重要です。当科の患者さんは、体重５kgの赤ちゃんから、時には１００kgを超える大人の方までいるため、幅広い対応が求められます。患者さんは移植手術とその後の免疫抑制療法を継続しながら、健康な人と同等の生活を過ごしています。

名大病院の肝臓移植は１９９８年にはじまり、今年で20年。東海地域の拠点病院として、年間25件程度の肝臓移植を実施しています。肝臓に病気をもった全ての患者さんに肝臓移植が必要なわけではありませんが、救命のため最後に残された治療としての役割は、今後も大きいと考えています。

肝臓移植手術風景

移植外科ホームページ
https://www.med.nagoya-u.ac.jp/transplantation_surgery/

季節のお話

高齢者の季節の変わり目と体調不良

老年内科長　葛谷　雅文

寒い冬から暖かい春にかけては陽気もよくなり、気分爽快、体調も良くなるような印象がありますが、実はこの時期に体調を崩される方が意外に多くいます。冬から春にかけては気候の変動や日中と朝晩の温度差が激しくなってきます。人間は恒温動物（気温や水温など周囲の温度に左右されることなく、自らの体温を一定に保つ動物）ですので、外気温が変わっても、自分の体の温度（体温）を一定に保とうとします。例えば、寒くなれば皮膚の血管を収縮させて体の熱を放出させないようにしたり、筋肉を震わせて熱を作ったりします。逆に、気温が高ければ皮膚から汗を出したり、皮膚の血管を拡張させて熱を逃がそうとします。これらの調節は主に自律神経（交感神経と副交感神経）を介して行われます。ゆっくり気温が変化すれば、人の体も徐々に対応できるため調節は少なくてすみます。春先で寒暖の差が激しいなどの急な気温の変化が起こると、上記の自律神経の活動を急激に変化させる必要があるために、そのバランスを壊しやすくなるようです。症状としては食欲不振・微熱・倦怠感・不眠・便秘・憂うつ・無気力など、多種多様な症状が出る可能性があります。

その対策としては、当たり前のことですが、規則正しい生活を心がけ、しっかり睡眠をとること、しっかり食事をとること、なるべくストレスを避けリラックスすることに尽きます。また急激な寒暖の差をなるべく避けるように、気温に合わせてしっかり衣服の調整をすることも重要です。なんだか体調がおかしいと感じたら、このようなことをまずは心がけてみてください。

また春先は花粉が舞う季節です。鼻水・くしゃみなど風邪と思われる症状が、実は花粉症が原因のこともあります。疑ったら、まずはかかりつけ医に相談をしましょう。

特集 TOPICS ②

助産師のご紹介

ＭＦＩＣＵ（母体胎児集中治療室）助産師　原田　江美子

病院に勤務している助産師の役割といえば、「出産に立ち会い、赤ちゃんを取り上げること」とイメージされる方々が多いのではないでしょうか。しかし助産師は赤ちゃんを取り上げるのみにとどまらず、妊娠・出産・産後の女性と赤ちゃん、そして家族に対して、健康に関する教育に携わったり、相談にのったりする専門家です。

妊娠期は、医師の健診とともに妊娠中の体重管理などの指導を行い、妊婦さんの健康管理をしています。また出産に向けた準備のための教室を開くなど、教育的な関わりもしています。

妊婦さんは出産や産後の育児に対して様々な不安を抱えています。特に当院で出産される妊婦さんは、妊婦さん自身が疾患をもっていたり、胎児（赤ちゃん）が疾患をもっていることが多く、不安を抱えています。そのため助産師は妊娠中から妊婦さんのメンタルヘルスケアに取り組み、産科医、臨床心理士、ＮＩＣＵ（新生児集中治療室）の医師やスタッフと協力して、妊婦さんやご家族が少しでも不安を軽減し、分娩に望めるよう努めています。

また分娩期は、産婦さんに寄り添い、出産に対し前向きに取り組めるよう痛みを和らげたり、出産が順調にすすむようにケアを行っています。産科は来院された方の急変も多いため、助産師は産婦さんと赤ちゃんの安全を守るために、母体救命や新生児の蘇生について院内外の研修に参加し、日々学んでいます。

産後は、お母さんと赤ちゃんの健康管理を行いながら、授乳指導や育児指導を行っています。産後は慣れない育児などから精神的に不安定になりやすい時期でもあります。皆さんもマタニティブルーや産後うつといった言葉を耳にしたことがあるのではないでしょうか？最近の統計では産後のお母さんの10～20％が産後うつになると報告されています。厚生労働省からも母親の産後2週間健診、1ヶ月健診の費用が助成されるようになり、産後の母子の健康を守ることが重点課題となっています。当院も今年度から産後2週間健診を開設し、退院後のお母さんの身体面だけでなく、精神面の健康状態を確認する場を設けています。

当院で出産されたお母さんやご家族が、「この病院で出産してよかった」と感じてもらえるよう、よりよいケアを目指していきたいと考えています。

退職のご挨拶

消化器内科長／教授　後藤　秀実

本年3月末で名古屋大学を退任いたします。学生または医師として鶴舞で37年間過ごしましたので思い出はいっぱいです。その大半は消化器内科の医師として勉強させていただきました。近年は、著しく進歩した消化器がんに対する診断・治療を世界（主にアジア）に広げることを夢として活動しています。この夢の実現のため、今後も活動したいと考えています。名古屋大学へは何も恩返しができておりませんが、さらなる発展を願っております。

中央診療棟Ｂ開院記念講演会を開催

今年1月に中央診療棟Ｂが開院したことを記念し、2月23日(金)に中央診療棟Ａ 3階講堂において、中央診療棟Ｂ開院記念講演会を開催しました。講演会では「〝がん〟と戦う～名大病院の先端医療～」をテーマに、堀田知光国立がん研究センター名誉総長による基調講演及び、当院のがん治療のスペシャリストによるパネルディスカッションが開催されました。

当日は、10代から90代の幅広い年齢層約200名が受講し、今や国民病と言えるがんの、診療の現在と未来に関する講演・議論に熱心に耳を傾けていました。

開院した中央診療棟Ｂでは抗がん剤治療、放射線治療などを行う専用治療室を充実させています。また、当院ではがん治療の未来を見据え、遺伝子情報〝がんゲノム〟に基づく医療に対応できる体制の構築、さらに小児がん拠点病院として出生前から生涯にわたる一貫した医療の提供に向けて、小児医療センターの立ち上げを目指しています。

Nagoya Disease Information Center ナディック通信

皆さん、こんにちは。看護部長の市村です。「広場ナディック」では、ほぼ毎週1～2件のイベントを開催しています。音楽会や手作りの会、ちぎり絵、折り紙など、様々なイベントがあります。手作りの会が開催されると、私はよく作品をプレゼントしていただきます。かわいいプレゼントが嬉しくて、全て大切に飾ったり、使ったりしています。右の写真は看護部長室に飾っている手作り作品です。皆さんも、ナディックで手作りにチャレンジして、大切な方にプレゼントされてはいかがでしょうか？きっと喜ばれますよ。

〈場　　所〉 中央診療棟Ａ 2階　広場ナディック

〈参加方法〉 イベントによって異なります。院内掲示をご覧ください。

TOPICS 特集 3

名大病院歴史探訪 其の11

名大病院の始まりは、1871（明治４）年に旧名古屋藩評定所跡に設けられた仮病院です。
これまで名大病院の歩みを医学部史料室（医学部図書館４階）の所蔵品によりお伝えしました。
最終回となる今回は、外来棟・病棟の南に位置する正門遺構についてご紹介します。

未来へ受け継ぐ歴史の門
旧愛知県立医学専門学校・愛知病院の正門遺構

JR 鶴舞駅を背に名大病院の正面入口から外来棟、病棟方面へ歩いていくと、途中で鶴舞公園に向かって開く２つの門が目に入ります。立体駐車場の南側にあるのが名大医学部の前身、愛知県立医学専門学校（愛知医専）の正門遺構で、病棟中央の南側にあるのが名大病院の前身、愛知病院の正門遺構です。

これらの門は、1914（大正３）年、愛知医専と愛知病院が天王崎町（現在の中区栄一丁目）から鶴舞に移転した際に築かれました。設計したのは愛知県営繕係の主任技師西原吉次郎で、大正期に活躍した建築家でした。２つの門はほぼ同じデザインで、花崗岩の門柱は大正期の西洋古典主義的な建築様式を伝えています。また、門扉の下部と中央部にある植物をモチーフとした曲線的な文様には、アール・ヌーボーの影響が見てとれます。

竣工以来110年近く、これらの門は、名大病院・医学部とともに、通行する人々を見守り続けてきました。戦時下の1941（昭和16）年には、遊休資材の動員令により囲障の鉄柵が供出されました。一方、1944（昭和19）年の東南海地震で建物が多大な被害を受け、翌1945年の名古屋大空襲では病院の半分以上が焼失しましたが、門には大きな被害がなかったと推測されています。戦後の1952（昭和27）年には、鉄の代わりに木造の門扉と柵が取り付けられていたことが、写真から分かっています。

門が元の姿に近い形に復元されたのは、病棟の新設工事が行われた1999（平成11）年のことでした。名大医学部学友会の寄附により、門の補強、洗浄、欠損部分の復元が行われ、夜間照明と銘板が設置されました。2007（平成19）年には、戦前の面影を残す遺構として文化庁の登録有形文化財（構造物）に指定されました。

愛知医専・愛知病院正門遺構の経緯に興味を持たれた方は、『名古屋大学史紀要』（第10号、2002年刊）もあわせてご覧ください。

1914年当時の病院と門

現在の病院と門

平成29年度名大病院災害訓練を実施

2017年11月29日(水)、名古屋市内で震度6強の地震が発生し、当院に傷病者が続々と押し寄せるという想定で、名大病院災害訓練が行われました。内容は災害対策本部の設置訓練、病棟等各部署の被害状況点検・報告訓練、トリアージ受入・救護訓練及び診療ブースの立ち上げ訓練です。

当日は医師、看護師、医療技術者、事務職員等の約200名が訓練に参加し、トリアージ訓練では、名大医学部保健学科の学生及び医療系専門学校の学生約100名が模擬患者として、ムラージュ（外傷などを模造したゴム・ラテックス製の特殊メイク）を施して参加しました。また、DMAT（災害派遣医療チーム）関連用品の展示も行われ、参加学生は普段見かけることのない道具を、興味を持って眺めていました。

名大病院では、東南海地震に備えて災害医療体制を整えています。このような訓練は災害拠点病院である名大病院としては不可欠であり、毎年継続していくことにより、災害医療と災害マニュアルがより充実したものとなることが期待されます。

■ ボランティアさん募集

当院ではボランティアさんを募集しています。
詳しくはホームページをご覧ください。

★ 名大病院　ボランティア募集ページ
https://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/recruit/volunteer/
『名大病院　ボランティア』で検索ください。

特定基金　医学部附属病院支援事業へのご協力のお願い

当院では本事業を通じて、診療環境の充実、患者さんへのサービスのさらなる向上、先進的な臨床研究の推進を進めてまいります。皆さまのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

詳細は、ホームページまたは外来棟各階に置かれているパンフレットをご覧ください。

URL：https://www.med.nagoya-u.ac.jp/kikin/hosp-kikin/

QR コードでもアクセスできます！

TOPICS 特集 4

中央診療棟Bのご紹介

光学医療診療部

世界屈指の拠点から未来を見つめ常に最高水準の内視鏡治療を

日本が世界をリードする低侵襲の内視鏡治療。その中でも名大病院の光学医療診療部は、内視鏡・超音波の診断・治療において世界最高水準の医療を提供しています。2018年1月には中央診療棟Bに移転し、その総面積は世界屈指の規模に拡張しました。部長である廣岡芳樹准教授に、新たな拠点の特色と今後の展望についてお話しいただきました。

患者さんのニーズにお応えするために

光学医療診療部では、胃・食道・十二指腸・小腸・大腸の良性・悪性疾患のほか、肝臓・膵臓・胆道のがんなどを対象に、内視鏡と超音波による診断・治療を行っています。以前の診療スペースは手狭になり、内視鏡・超音波の診療を希望される患者さんを長くお待たせする状況となっていましたが、新たな拠点は世界屈指の規模に拡大。患者さんのニーズにお応えすると同時に、今後の医療の進化を見据えて、将来も世界最先端の診療を提供できるよう設備・機能を強化しています。

内視鏡治療の今後の進化に対応

今回、鎮静下で内視鏡検査・治療を受ける患者さんの増加を見越して、安全に意識が回復するまで患者さんにお休みいただくリカバリールームを充実させました。部屋には看護・観察のため看護師を配置するほか、患者さん一人ひとりの脈や心電図などをリアルタイムでモニタリングする設備を導入。情報が電子カルテに記録され、異変への速やかな対応を可能としています。また、最新装置を導入した内視鏡洗浄室も新設しました。その特色は「いつ、誰に、どの検査で使用し、誰が洗浄したか」など、軟性内視鏡1本1本の使用履歴を管理できる点にあります。既存の装置も刷新し、中央診療棟Aの内視鏡洗浄室で行う洗浄と合わせて管理することで、院内全体の軟性内視鏡を一元管理することが可能になり、これまで以上に感染予防・安全管理を徹底しています。

加えて、常に世界最高水準の診療を提供するために、手術室・検査室も将来を見据えた設計となっています。体内を透視しながら内視鏡検査・治療を行う専用のX線透視室を設置したほか、消化器内科・消化器外科・麻酔科が連携し、全身麻酔下で内視鏡手術を行うケースが増えているため、内視鏡手術に特化した手術室も用意しました。さらに、カプセル内視鏡室を設け、ワイヤレス内視鏡の治療の発展にも備えています。

次世代に貢献する医療開発を目指して

当院は地域の患者さんにとって最後の砦とも言え、光学医療診療部もその使命のもと、難度の高いがん患者さんなどに最善の治療を提供しようと努めています。それと同時に、世界に対する医療貢献、次世代に資する新たな医療の開発も我々の役割です。そのためアジアの医師や看護師に教育指導を行うアジア内視鏡室を開設し、国際貢献に力を入れています。また、現在の医療の主眼は病気の早期発見・早期治療ですが、今後は予防にも力を入れていく必要があります。基礎と臨床の研究者が協力して予防医療の研究を進め、将来、がん予防に貢献することが、大学病院としての私達の究極の目標です。

健康講座

2018年3月8日は「世界腎臓デー」

腎臓内科長　丸山　彰一

皆さん、腎臓はご存じですよね。おなかではなく背中のほうに2つある大切な臓器です。大きさは握り拳くらいで、空豆のような形をしています。ところで腎臓が何をやっているのかはご存じでしょうか。「おしっこを作っている!?」正解です。でもそれだけではありません。不要な水分や毒素を捨てるという役割の他に、塩分やミネラルを調節する、酸性・アルカリ性のバランスを保つ、血圧を調整する、血液の濃さを調整する、骨を健康に保つといった、ちょっと変わった働きもしています。最近は、クロソー（Klotho）という老化を抑える蛋白質を作っていることが分かってきました。腎臓にはまだまだ分からないことが多く、私達もこうしたことを日々研究しています。

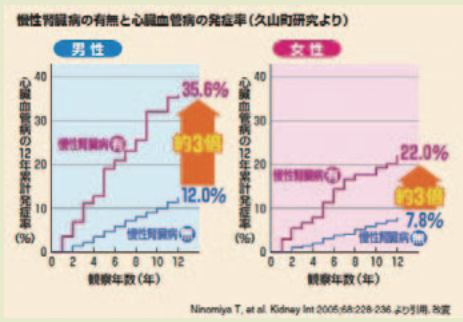
ここで、今分かっていることを整理してお伝えしたいと思います。CKD（慢性腎臓病）は、腎臓の働きが60%以下になっているか、尿に蛋白尿が出ている状態が3ヶ月以上続く場合を言います。日本では、成人の8人に1人、1330万人がCKDにかかっています。CKDの人は、将来透析療法などを要する慢性不全になる危険性が高いだけでなく、心臓病や脳卒中になる危険性が3倍も高いことが分かっています。CKDの主な原因は、高血圧、糖尿病、肥満、そして加齢です。

最後に、CKDについて忘れてはならないことを3つお伝えします。

① CKDは、末期まで症状が全くありません。
② 通常の健康診断（血液検査と尿検査）でCKDは簡単にみつかります。
③ CKDは危険ですが、良い治療法があります。

世界腎臓デーをきっかけに、あなたの大切な腎臓を守って元気に長生きしましょう！

世界腎臓デー　ポスター



CKDの有無と心臓血管病の発症率

■ ミニニュース

「コンサート」を開催しました

中央診療棟A 2階ピアノ広場にて、2017年10月24日㈫に『Satisfy My Soul Gospel Choir』、11月16日㈭に『ドリームはな歌友の会』、12月22日㈮に『パーキンソン病友の会と竹田千波さん、鈴木千春さん、鈴木信子さん』の方々によるコンサートを開催しました。

それぞれが趣向を凝らした演目となっており、多くの方にご参加をいただきました。

▲10月24日に行われたコンサート

▲11月16日に行われたコンサート

▲12月22日に行われたコンサート

■ 禁煙のお願い

患者さんの健康をサポートすべき医療施設として、病院敷地内の全面禁煙を実施しています。皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

名大病院 かわらばん　筆 石黒 直樹
No.108　医学部・医学系研究科総務課
TEL 052-741-2111（代表）
発行日　2018年3月1日

HPのご案内
「かわらばん」は、名大病院ホームページでもご覧いただけます。
バックナンバーや災害医療支援活動の状況、医事統計などを掲載しています。
ホームページアドレス　https://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/（トップページ⇒病院概要⇒刊行物）